****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 356 号
－環境・農業・食べ物など情報の交流誌－
2013.08.22（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.yamazaki-i.org
**********発行部数 1,081 部**********

□　目　次　　□----------

＜巻頭言＞　えだ豆の里の直売所「ゆめあぐり野田」　石川秀勇
＜山崎農業研究所　37 回山崎記念農業賞表彰式
および総会記念講演（速報要旨）＞
1．山崎記念農業賞表彰式
（1）選考委員長報告（要旨）
＜お知らせ＞　山崎農業研究所所報『耕 No.130』発行されました
＜編集後記＞　盛夏に思う

＜巻頭言＞　えだ豆の里の直売所「ゆめあぐり野田」

各地で農産物直売所が盛んである。平成 23 年 7 月公表の農水省の全国調査によれば、16,816 直売所、年間総販売額 8,767 億円、1 直売所当たりの平均販売額 5,214 万円とのことだ。運営主体についてみると、「生産者又は生産者グループ」が 64%と最多で、次いで「農協」（女性部、青年部によるものを含む）が 14%、「第 3 セクター」や「地方公共団体」が計で 4%弱、「その他」の民間企業等によるもの 18%だという。

筆者在住の千葉県野田市では、公設民営の直売所が平成 20 年 6 月に開設、地方自治法による指定管理者制度に則り、管理を指定管理者に委託して運営してきている。開設前年に制定された条例では、“農業者、障害者団体による農産物等に販売の場を提供することにより、市民に新鮮で安全な農産物を供給し、もって農業の振興及び障害者の自立の支援を図るため設置する”と謳い、この直売所の位置づけをしている。

当直売所は、市の中心部でなく農村部を走る県道沿いの、障害者関係の整備

施設の多い地区の一角に設置されている。名称は「ゆめあぐり野田」といい、公募で決められた。公表されている最近年（平成 23 年度）の業況は、概数で利用者数 10 万 7 千人、年間販売金額 1 億 4 千万円、といったレベルにある。

この「ゆめあぐり野田」の現況について、生産者であり指定管理者組織の役員を務める方から説明をうけた。農産物等を出荷する農業者等の登録会員数は 125 名ほど。開設来、委託を受けて管理に当たってきたのは任意組織の「運営組合」であったが、平成 24 年秋の総会を経て、25 年 3 月末からは 10 名前後の専業農家等の出資により設立の農事組合法人（名称：ゆめあぐり野田）が直接の管理に当たり、一般の登録会員は「協力会」を組織し法人の執行に側面から協力していく仕組みと改められている。

当地の誇る農産物に「えだ豆」がある。平成 14 年の市町村統計で野田市が出荷量で全国 1 位となり、17 年には全国から参加者の集う「えだ豆サミット」が当地で行われるなどもした。JA を通して東京や埼玉への市場出荷が多いが、「ゆめあぐり野田」でもえだ豆が地元産の農産物を代表する品目となっている。この夏は、テレビ各社でえだ豆を取り上げた番組が少なくなかったが、その取材が当地でしばしば行われ、「ゆめあぐり野田」がときにテレビ画面でも紹介され、直売所でのえだ豆のお客さんは例年より何割増と活況だったという。

「公設」ということで市は土地および建物など施設整備をするとともに、運営管理の枠組みを示している。その枠組みの下で、指定管理者の側の農業者が主体をなす「民」のほうでは、必要な人件費や光熱水料費、販売促進費など諸経費を抑えつつ、販売高等に示される実績をいかに伸ばしていくか、多面的な工夫が欠かせない状況にあると言えよう。

石川秀勇
山崎農業研究所幹事、千葉県野田市在住
yamazaki@yamazaki-i.org

＜山崎農業研究所　37 回山崎記念農業賞表彰式
および総会記念講演（速報要旨）＞
期日：2013 年 7 月 27 日（土）13：30～
場所：NTC インターナショナル
1．山崎記念農業賞表彰式

（1）選考委員長報告
（2）受賞者ご挨拶
2．総会記念講演：電力需要に応える再生可能エネルギー
（1）クリーンな発電としてのローカルエネルギー
　渡邊博氏　山崎農業研究所幹事
（2）ここまで進んだ小水力発電
　新谷和男氏　NTC コンサルタンツ・小水力発電グループ代表

1．山崎記念農業賞表彰式
（1）選考委員長報告（要旨）……田口　均氏　選考委員
第 37 回山崎記念農業賞の受賞には長野県辰野町倉沢久人氏が選考された。

選考理由
贈呈対象：倉澤久人
所在地：長野県辰野町辰野 1342-1
事業内容：電気工事ならびに精密部品工作機械製作業
贈呈理由：地域の小さな水を生かす超小水力発電機の開発および普及への貢献

倉澤さんが関心を持ったのは 10 年前、ある講演会で小水力発電機の話を聞き、もっといい方法があると感じた。まだ街灯のない近所を明るくしようと思った。

倉澤式の小水力発電機特徴は落差 8 メートル、流量 4 リットル/秒、160 ワットが発電できる。また極めて高い耐久性があり、磁極の多極化で低回転での効率的発電を可能にした。

小型軽量（水車周辺機器含め二十数キログラム）であるために設置も容易である。維持管理も容易である。今後微風力発電にも応用したいと実験を進めている。

このような特長を生かし、中山間地域の「小さな水」を生かして、地域の持続的暮らしを自分たちの手でつくることは、風土を生かす精神から産まれた発想であり、その普及および将来性を高く評価し、第 37 回山崎記念農業賞に選定した。

＜お知らせ＞　山崎農業研究所所報『耕 No.130』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.130』が発行されました。
ご希望の方には雑誌を頒布（有料：1,000 円）いたします。
yamazaki@yamazaki-i.org
までご連絡ください。

目次（抜粋）
《土と太陽と》（巻頭言）
山村の未来を思う◎栗田和則
［第 144 回定例（現地）研究会］
ワークショップ：「果樹王国ふくしま：産地再生に向けて」
　・研究会の概要
【基調報告】ベラルーシ現地視察をふまえて◎今野文治
【解題 1】住民参加型産地再生・再興へ◎小泉浩郎
【解題 2】放射性物質：汚染・除染の考え方◎渡邊 博
【解題 3】産地再興：歴史に学ぶ◎石川秀勇
【解題 4】風評被害：そのメカニズムと対策◎家常 高
○分科会報告
○参加者の声（櫻井 勇／益永八尋／佐々木哲美）
［特別寄稿］
畜産を農業に回帰させ持続する農業を構築しよう◎本田廣一
〈連載〉“生きもの語り”の世界から(3)人間中心主義への批判◎宇根 豊
〈農村定点観測〉
○ミズバショウの里のむらづくり／山形県・照井栄市
○高温対策に備えた稲づくり／新潟県・吉原勝廣
〈追悼・山田民雄さん〉山田民雄君は劇作の先立ちだった／松坂正次郎

＜編集後記＞　盛夏に思う

最近読み始めた本の 1 冊が『里山資本主義』（藻谷浩介 NHK 広島取材班、角川 One テーマ 21）。なかなか、いやかなりおもしろい。

「はじめに」にこんな記述がある。「その年〔2011 年〕の六月、私は東京から広島に転勤した。そこで思いがけない出会いに恵まれた。田舎のかかえる永遠の課題、過疎や高齢化という暗いイメージの対極をいく『元気で陽気な田舎の

おじさんたち』に出会い、目からぽろぽろと鱗を落とされたのだ」。山陽山陰の農村部は、日本のなかでもとりわけ過疎や高齢化がすすんでいる地域であるが、そこに NHK のスタッフは可能性を見出したのだ。

銘建工業（岡山県真庭市）の製材廃棄物（木くず）による木質バイオマス発電や木質ペレット化の取り組み。和田芳治さん（広島県庄原市）のエコストーブ（ロケットストーブ）の利用。洲濱正明さん（島根県邑南町）の耕作放棄地での放牧、松嶋匡史さん（山口県周防大島町）のジャム加工等々。都会で暮らし、中央のマスメディアのみにふれているとなかなか知ることのできない素敵な事例の数々が紹介される。

「里山資本主義」について藻谷氏はこう定義する。「『里山資本主義』とは、お金の循環がすべてを決するという前提で構築された『マネー資本主義』の経済システムの横に、こっそりと、お金に依存しないサブシステムを再構築しておこうという考え方だ。お金が乏しくなっても水と食料と燃料が手に入り続ける仕組み、いわば安心安全のネットワークを、予め用意しておこうという実践だ」。これを私的に解釈すれば、身近な自然をみつめ・活かす技術（わざ）とそれを結び育てるネットワークが、日々の暮らしの安心と豊かさの土台になる、とでも言えようか。

今年の夏の暑さは格別である。がまんできずにエアコンのスイッチを入れてしまうことも少なくない。だが、だからといって 3.11 前の暮らしに丸ごと戻ろうとも思わない。3.11 がはっきりとさせたのは、金と外部エネルギーに依存するシステムのもろさであった。世界経済をみれば、それこそいつ恐慌のドミノ倒しが始まってもおかくしない状態が続いている。そうしたなか、「里山資本主義」というのは案外そう遠くない将来、当たり前の実践になるような気がするのだ。

藻谷浩介　NHK 広島取材班 著
『里山資本主義―日本経済は「安心の原理」で動く』
角川書店刊、新書判、308 ページ
定価（税込）： 820 円
発売日：2013 年 7 月
ISBN 978-4-04-110512-2-C0233

2013 年 08 月 19 日

山崎農業研究所会員・田口　均
yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売
『自給再考――グローバリゼーションの次は何か』
（発売：2008/11　定価：1,575 円 ）
http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/
たくさんの書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん（文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授）
グローバルの次は何？ ～卒業するゼミ生諸君へ
http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html
◎戎谷徹也さん（大地を守る会）
ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記　“あんしんはしんどい”
「自給率」の前に、「自給」の意味を
http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/
◎吉田太郎さん（長野県農業大学校教授、執筆者）
キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました
http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182
◎関良基さん（拓殖大学政経学部）
ブログ：代替案　書評：『自給再考　－グローバリゼーションの次は何か』
http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0
◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）
ブログ：神流アトリエ日記（3）「書評『自給再考』」
http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive
◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か
http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html
◎森川辰夫さん
NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報
http://www.rircl.jp/shiryo.htm
◎日本農業新聞／書評
（2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優）
http://yamazaki-i.org/
（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）
◎小谷敏さん（大妻女子大学）

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ（2009/01/31）
http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219
◎白崎一裕さん（(株）共に生きるために）
月刊とちぎ V ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫
http://yamazaki-i.org/
（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）
◎塩見直紀さん（半農半 X 研究所、執筆者）
ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！
立国集。
http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
3、1 回 1 テーマ、10 行位に。
4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回　357 号の締め切りは 09 月 02 日、発行は 09 月 05 日の予定です。

＜本誌記事の無断転載を禁じます＞
****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 356 号
最新号・バックナンバーの閲覧
http://archive.mag2.com/0000014872/index.html
http://nazuna.com/tom/denshico.html
購読申し込み／解除案内
http://www.yamazaki-i.org

2013.08.22（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人

mailto:yamazaki@yamazaki-i.org

**********ここまで『電子耕』**********